

## 京都・嵯峨院跡（史跡大覚寺御所跡）

- 1 所在地 京都市右京区嵯峨大沢町
- 2 調査期間 一九八八年（昭63）七月～八月
- 3 発掘機関 (宗)大覚寺
- 4 調査担当者 本中 真（奈良国立文化財研究所）・磯野浩光（京都府教育庁）・仲 隆裕（京都市文化観光局）
- 5 遺跡の種類 宮殿跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 八世紀～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（京都西北部）

大覚寺は、京都盆地西北部の風光明媚な嵯峨野に位置する。平安京遷都（七九四年）後、皇族・貴族は、しばしば嵯峨野周辺に遊獵し、山荘などを営んでいた。特にこの地を好んだ嵯峨天皇は、山荘を離宮・嵯峨院とし、たびたび文人らとともに、この離宮で、賦詩・奏楽などを催したことが、史料に散見し

ている。この嵯峨院は一時退転するが、九世紀後半に大覚寺となったものである。現在の大覚寺境内の大沢池や、藤原公任の「滝の音は 絶えて久しく なりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ」『拾遺集』巻第八）の歌で有名な名古曾滝跡は、この嵯峨院の遺跡の一部と考えられており、平安時代初期の数少ない現存する庭園遺構として、現境内を含めて、国の史跡（大覚寺御所跡）と名勝（大沢池附名古曾滝跡）に指定されている。

大覚寺では、名古曾滝跡から大沢池北岸一帯の環境整備を計画し、復原整備のための基礎資料を得るために、一九八四年度から国庫補助を得て毎年発掘調査を継続しており、一九八八年度の第五次調査に至り初めて木簡が出土した。

第一次～第四次調査では、名古曾滝跡南側で、礫敷の護岸に適宜景石を配した平安時代から中世に至る遣り水の痕跡（長さ約四〇m）を検出した。またその南東では、大量の平安時代の遺物（瓦類、緑釉陶器など）を含む大溝と、この大溝の大沢池への注ぎ口などを検出した。この大溝の注ぎ口は、平安時代に少なくとも三回改修されており、護岸や景石の様子から嵯峨院の遣り水を踏襲したものである可能性は極めて高い。

第五次調査は、上記の大溝の大沢池への注ぎ口の上流（北）部分を検出したものである。過年度の成果と合わせると、この大溝は緩やかに蛇行するもので、注ぎ口から上流へ長さ五〇m弱が検出された

こととなる。この大溝の注ぎ口では、修景した痕跡が認められるものの、上流の大半は素掘りの溝で、この時期の庭園における遣水の工法に新しい知見を加えた。またこの大溝からは、遺物が大量に出土しており、現在整理作業中であるが、主な遺物は、木簡二一点・墨書土器十数点のほか、緑釉陶器・土器類・瓦類・木製品などコンテナ約四〇箱分である。

木簡は全て大溝の黒色粘土層から出土し、伴出土器の年代から九世紀前半のものと考えられるが、残念ながら全て折損・腐食が著しく、赤外線カメラでかろうじて判読できる状態のものである。

8 木簡の積文・内容

- (1) 葉用所 (82)×(12)×3 081
- (2) 御廩請 〔飯カ〕 (68)×(30)×3 081
- (3) 廣 (62)×37×7 081
- (4) 等料 〔納カ〕 (102)×(21)×2 081
- (5) 子嶋 〔廣カ〕 (59)×(21)×2 081

- (6) 右明 (57)×17×1 081

- (7) 衆料 〔拾カ〕

・ 〔拾カ〕 (88)×(15)×2 081

(1)は、葉関係の官司に係わる木簡である可能性が高く、(2)は、嵯峨院の家政機関と関係があるかもしれない。そのほか、墨書土器の中には「供御」の文字を記したものの(杯の破片)や、「文」〔供カ〕「申請」〔供カ〕「事」〔供カ〕など文書を習書したもの(土師器皿の破片)などが出土している。

このように、木簡や墨書土器の出土により、前述の大溝が九世紀前半の嵯峨院の庭園遺構(遣り水)を踏襲したものである可能性がますます高くなった。

なお、木簡・墨書土器の判読に際しては、奈良国立文化財研究所の多大の御助力を得た。

9 関係文献

大覚寺『史跡大覚寺御所跡 発掘調査概報』(一九八六年)

(磯野浩光)